

K-712

天童市埋蔵文化財調査報告書第17集

天童市清池清水遺跡

平成 9 年 3 月

天童市教育委員会

序

山形県の中央部に位置する天童市は、自然環境に恵まれ、縄文時代以来より数多くの集落が営まれてきました。

今回発掘調査を行った清池清水遺跡は、乱川、押切川等によって形成された扇状地の扇端部に位置し、周囲には水量豊富な泉が所在するという、大変恵まれた環境にあります。遺跡は、西沼田遺跡の整備事業に資するための資料収集という目的から、天童市教育委員会により、平成9年度に発掘調査が行われました。

この調査によって縄文時代の土器、石器等、数は少ないながらも、貴重な資料が得られました。

これらの貴重な資料は、学術資料として、遺跡の所在する成生地区はいうに及ばず、天童市全体の歴史を理解するうえで欠かせないものです。

そうした貴重な資料が収録されている本報告書が、郷土の理解のために広く市民に活用されることを切に願っております。

最後になりましたが、本発掘調査に対して大変なご指導・ご協力をいただきました文化庁記念物課、山形県教育庁文化財課、(財)山形県埋蔵文化財センター、西沼田遺跡検討委員会、川崎利夫氏、茨木光裕氏、村山正一氏の諸機関・諸氏に対して深謝の意を表すとともに、発掘作業に従事された調査協力員のみなさまに厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

天童市教育委員会
教育長 武田 良一

例　言

- 1 本書は、西沼田遺跡の整備に係る関連遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査から報告書作成にいたる業務は、天童市教育委員会が実施した。

- 3 調査要項は下記のとおりである。

遺　跡　名　清池清水遺跡

所　在　地　山形県天童市大字成生字仲田地内

調査期間　平成9年3月13日～平成9年3月21日

調査担当

主任調査員　川崎利夫（日本考古学協会員）

調査員　茨木光裕（日本考古学協会員）

調査員　村山正一（日本考古学協会員）

事　務　局

天童市教育委員会社会教育課長　伊藤　博明

主幹　長瀬　一男

主査　長谷川　武

- 4 本報告書の執筆は長瀬一男、長谷川武が分担して行った。

- 5 発掘調査から本報告書の刊行にいたるまで、文化庁記念物課、山形県教育庁文化財課、
(財)　山形県埋蔵文化財センター、西沼田遺跡検討委員会の御指導・御協力を賜った。

- 6 本調査で出土した資料は、天童市教育委員会で一括保管する。

本文目次

第Ⅰ章 序章.....	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の立地と環境.....	1
第3節 周辺遺跡と歴史的環境.....	3
第Ⅱ章 調査の成果.....	5

報告書抄録

挿図目次

第1図 発掘区設定図.....	2
第2図 周辺の遺跡.....	4
第3図 清池清水出土土器.....	5
第4図 清池清水出土石器.....	5

第Ⅰ章 序 章

第1節 調査に至る経緯

天童市大字藏増に所在する西沼田遺跡は、昭和62年の国史跡指定以来整備が続けられており、また発掘調査も昭和60年、平成6年と、発掘調査が行われ、徐々にではあるが遺跡の内容が判明しつつある。

しかしながら、西沼田遺跡を取り巻く周辺の環境、特に遺跡間のネットワークについて長らく不明であった。そこで、天童市教育委員会では、西沼田遺跡を取り巻く状況、特に遺跡の確認とその内容の把握を行い、今後の西沼田遺跡の整備事業に資するために、国庫補助事業を受けて、周辺遺跡の発掘調査を実施することとした。

上記のことを受け、今回調査された清池清水遺跡は、天童市大字成生字仲田地内に所在する。

発掘調査は、天童市教育委員会が主体となり、平成9年3月13日から3月21日にわたって実施した。発掘の対象面積は900m²である。調査区は遺跡全体、東西150m、南北100mにわたって10m方眼のグリッドを設定し、それに基づいて遺跡中央部を中心に試掘坑を設けた。

調査の目的が、遺跡の範囲・内容の確認にあることから、遺構・遺物の確認にとどめ、全面的な発掘は行っていない。

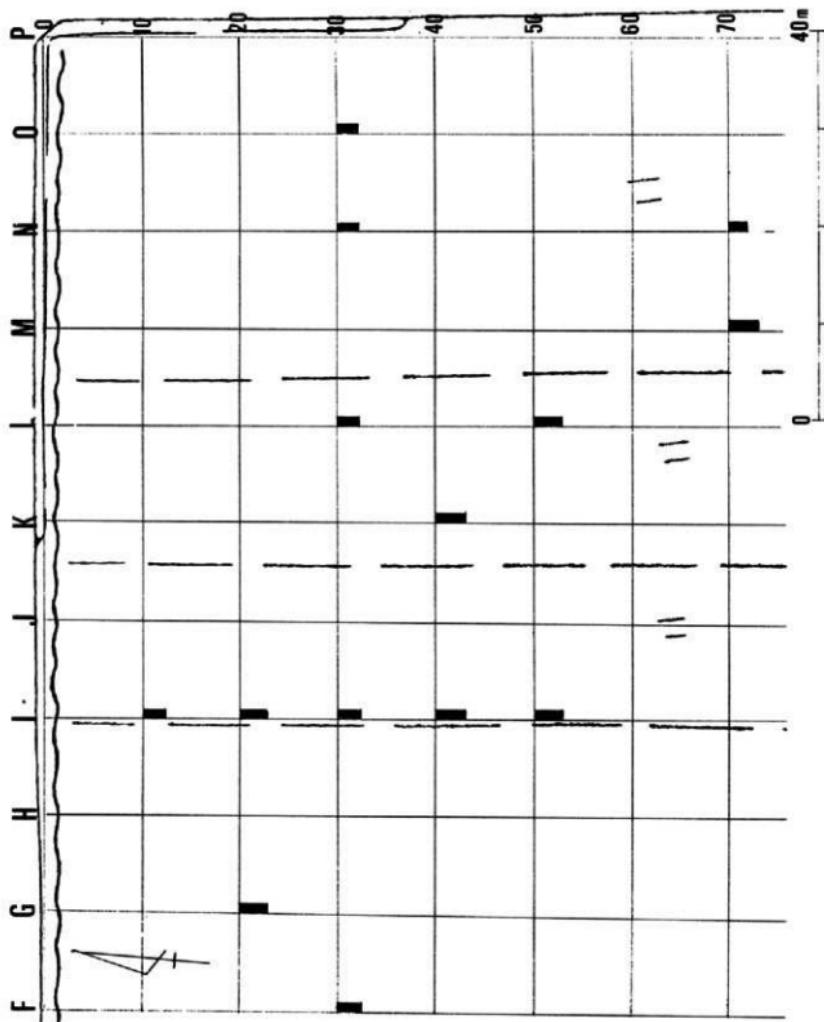
調査の結果、当初期待されたような、西沼田遺跡に類する古墳時代後期の遺構・遺物などを確認することはできなかったが、若干の縄文土器、石器などを検出することができた。

第2節 遺跡の立地と環境

天童市は、山形県の内陸側、ほぼ中央部に位置し、北は乱川、東は奥羽山脈、南は立谷川、西側を最上川によって囲まれている。市東側と西側は明瞭な地形上の差異が認められ、東側は奥羽山系を水源とする、馬見ヶ崎川、立谷川、乱川、倉津川などの西流する急峻な河川によって形成される何川によって扇状地が形成されている。

西側は、いわゆる天童低地と呼ばれる後背湿地が広がり、河川改修以前の地形図によると、最上川などの河川の氾濫によって形成された三日月湖や旧河道の跡を確認することができる。

清池清水遺跡は、天童市街地から西北西へ約3km、西沼田遺跡から北へ約2kmの、扇状



第1図 発掘区設定図

地と後背湿地の境目に位置している。

遺跡は、西沼田遺跡において顕著に確認されるように、地下水が豊富な地域であり、特に、遺跡の北方に位置する大清水地区においては、箱清水、長清水などの地名にみられるように、湧水帯が点々と所在している。

清池清水遺跡もこのようないい自然環境を十分利用できる立地条件にあり、今回検出することはできなかったが、西沼田遺跡同様の良好な保存状態を呈する遺跡が、周辺に存在する可能性が高いと考えられる。

第3節 周辺遺跡と歴史的環境

清池清水遺跡の立地する扇状地扇端部には縄文時代以降、各時代にわたって多くの遺跡が存在するが、西沼田遺跡を除くと、ほとんど発掘調査が行われておらず、詳細は不明な遺跡が多い。

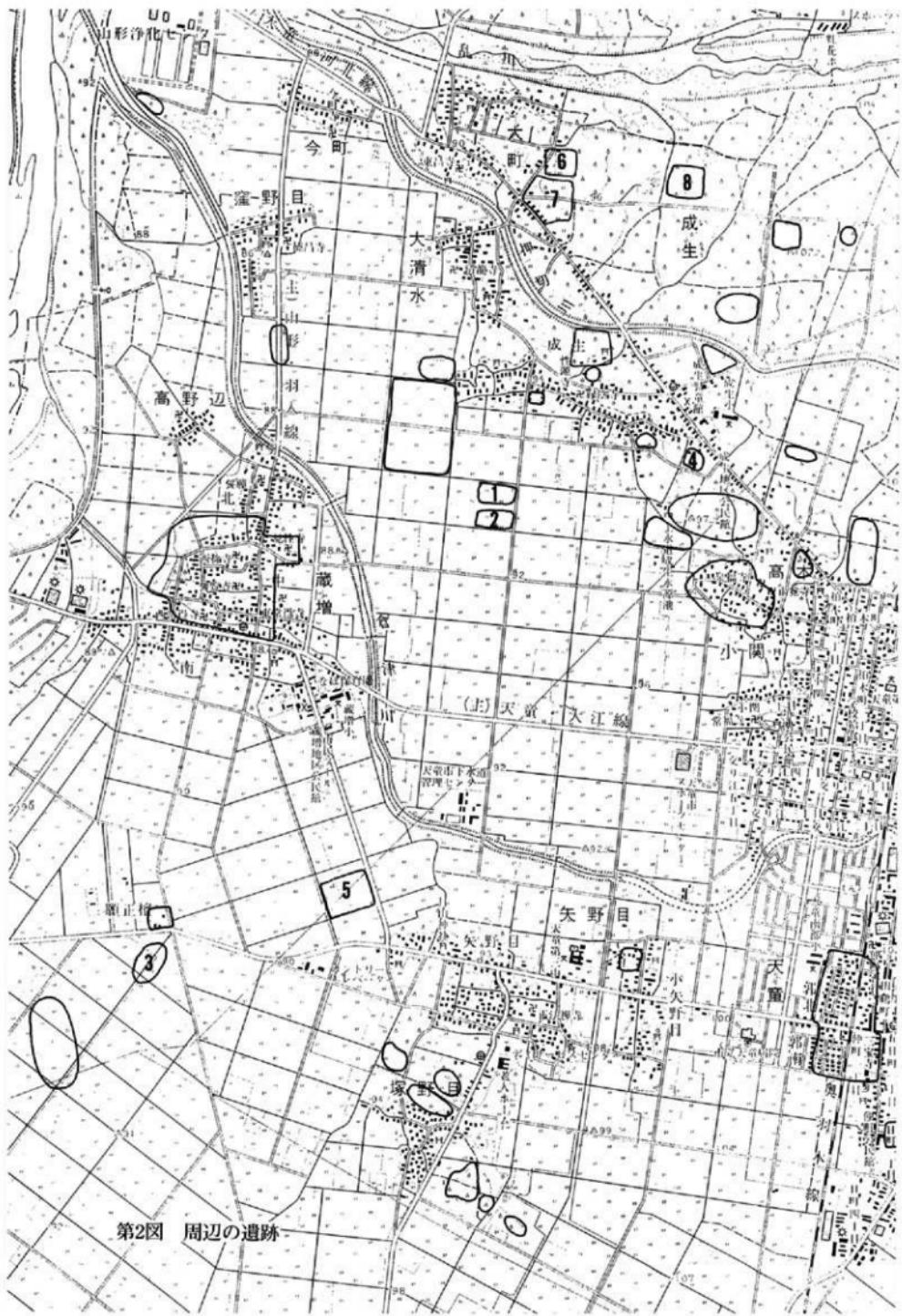
各時代ごとに周辺部の遺跡を概観していくと、縄文時代には、清池清水遺跡（1）の南に隣接する八反記田遺跡（2）、順正塙遺跡（3）において縄文時代の土器片、石器などが採集されている。

弥生時代は、天童市全体でも遺跡の少ない時期である。弥生時代の集落跡である地蔵池遺跡（4）は、発掘調査が行われている数少ない遺跡の一つである。1964年、天童市教育委員会が主体となり発掘調査を行い、住居跡、弥生式土器、石器等が出土している。

古代では、西沼田遺跡（5）が著名である。昭和60年、平成6年に発掘調査が行われ、古墳時代から律令期にかけての遺構・遺物が多く確認されている。特に、水濱け状態で出土した木器、建築部材などは保存状態が大変良好であり、学術資料として非常に貴重なものである。昭和62年には、国史跡として指定を受けている。また、律令期では清池清水の北西側に三条で条里遺構が確認されている。この時期、扇状地の扇端部への占地が目立つようになる。

平安時代以降は市内全域にわたって遺跡の増加が目立つ。平安後期に設置された成生庄に関連する遺跡が多く、鎌倉時代に成生庄の政所が置かれていたと伝えられる大字大清水字二階堂周辺には、二階堂（6）、高野坊（7）、後藤原（8）等、庄園に関連した遺跡が多く所在する。これらの遺跡は、成生庄の地頭であった二階堂氏の成生庄進出に伴って形成されたものであろうと推測される。

中世後期から近世にかけては、斯波氏の一族である天童氏の入封と、舞鶴城への移転に伴い、中心街が舞鶴山西部に移り、徐々に現在みられるような田園地帯としての景観を形成していったものと考えられる。



第2図 周辺の遺跡

第Ⅱ章 調査の成果

今回の発掘調査では、近代以降の耕作に伴う木材などが一部出土したが、それ以外明確な遺構は検出されなかつたため、遺構については割愛する。遺物は縄文土器、土師器、石器などが出土している。いずれも搅乱層からの出土である。

(1) 土器 (第3図)

1は単節R L縄文、2は単節L R縄文を横位に施している。3は半撫の縄文を横位に施したものである。いずれも縄文時代後期の所産と想定される。

(2) 石器 (第4図)

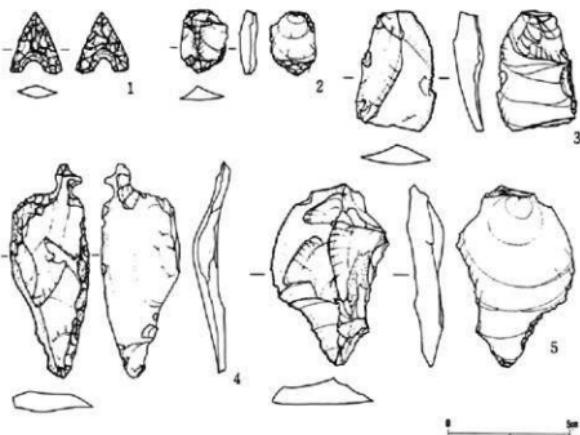
石鋤 (第4図1) 無茎凹基式のもので、完形品である。両側縁及び、基部側から入念な調整加え、整形を行っている。長さ25.5mm、幅21.6mm、厚さ5.2mmを測る。

石匙 (第4図4) 横長の剥片を素材とし、周辺部に調整を施し、刃部を作出している。基部側には、ノッチ状に調整を施し、つまみを作り出している。また、左側縁は被熱している。

調整痕を有する剥片 (第4図2・3・5) 2は縦長剥片を素材とし、基部及び先端部に細かな調整を施している。特に先端部は、先鋒に仕上げようとする意図がみられ、また、欠損部は調整剥離を切っていることから、錐状の石器であったと想定される。3は縦長剥片を素材とし、裏面右側面に調整を施したもの、5は同じく縦長剥片を素材とし、裏面右側縁下半部にノッチ状の調整を施したものである。5の背面右側面は被熱により一部はじけている。



第3図 清池清水出土土器



第4図 清池清水出土土器

天童市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集
天童市清池清水遺跡発掘調査報告書

平成9年3月31日

編 集 天童市教育委員会

発 行 天童市教育委員会

天童市老野森一丁目1番1号

TEL 0236-54-1111（代）

印 刷 豊田太印刷所

山形市立谷川二丁目938-8

TEL 0236-86-2518（代）
